

石枯田

楠本純子

四季出版

雲秋思

俊英俳句選集 9

発行——昭和六十二年十一月一日

著者——楠本純子

発行人——松尾正光

発行所——東京四季出版

発売——ギャラリー四季

〒104 東京都中央区銀座六―七―十六 岩月ビル

電話〇三(五七四)九三八八 振替東京四―五〇〇三五

印刷・製本——三和印刷

定価——二二〇〇円

©1987 Sumiko Kusumoto

ISBN 4-87621-087-X

落丁・乱丁はお取替いたします

就いて誌す——楠本憲吉

私と姉は、「なだ万」という老舗の事情によって、姉は大阪の船場、私は六甲山麓の岡本に暮らしていた。

姉は当時、相愛高女生、私は灘中生であった。

土曜日、姉は学校が終ると、鞆を提げて、岡本へやって来た。

私はそれが待ち遠しくて阪急岡本駅の改札口で何台もの電車を待ったものである。

岡本の家は、武庫郡本山村北畑という、六甲山のすぐ山裾にあった。私の家の前を半丁も北へ登ると、それは山頂にある村社保久良神社へのつづら折りの山参道になるのである。夜のとばりが阪神間の街なみをつつむころ、国鉄摂津本山駅あたりから、北に六甲山を見上げると、黒いベールのなかで、一点またいたっている灯が見える。本山北畑サフケ原、保久良神社の常夜灯である。金鳥山の中腹、標高百八十二メートルの神社にあるこの灯は、昔から「灘の一つ火」として、大阪湾を航海する船乗りたちから航路標識として親しまれてきたものである。

いまの灯ろうは、百数十年あまり前の文政八年に建設されたといわれ、昔はたいまつ火をたいしたものらしく、灯ろうの付近からは炭が出てくる。昔から地元の氏子が

“この火を絶やすな”とタネ油を入れたピンをさげ、約一キロの山道をぬって登り、火をつけた。この連中のことを「天王講」といった。私の母親も天王講のひとり、私が出征中の二年半、一日も欠かさず、私の武運長久を祈って、早朝はだし参りをしてくれたのだ。

山頂に立つと、東は生駒連山、西は鉄拐山、淡路島まで見渡せる絶好の地である。保久良という名は、火の倉から出たといわれている。

保久良神社は、古生層の上にあり、付近が古代の祭祀の遺跡にふさわしく、弥生式土器、石器、銅戈などを出土している。この神社を村民たちは「天王さん」とよんでいたが、これは牛頭天王（すさのおの命）を主祭神としたためである。神社の沿革ははっきりしないが、鎌倉時代の建長二年に改築されたという記録は残されている。

私の部屋はその岡本の家の二階にあった。北窓には山肌が迫り、坐ったままで瀬戸内海が見える日当りのいい南面の部屋であった。

その部屋に、さし向いで坐れる大型の机を買って貰い、姉がきたときは海側に、私は山側に坐して、お互い、一週間のでき事について話しながら詩を作り、和歌を

製し、俳句を作りあって、家族の寝しづまった深夜まで時を過したものである。

姉には相愛高女の国語の教師、歌人の安田青風氏がおり、私には灘中の清水実先生がいた。それぞれの影響下に文芸の全く初歩的な教えを授かっていたわけである。

この土曜の夜の時間帯ほど楽しいものはなかった。姉弟愛というものはこうして生れたのであるが、それは今日まで続いている。

私にとって姉は「絶対」である。

しかし、私が、姉にとって、「絶対」であるかどうか、それはご本人に伺ってみなければ分らない。

この度、姉は、久し振りに第三番目の句集を上梓することとなった。

弟としてこんな喜ばしいことはない。

句集は、昭和五十二年から最近までに成る約三百余句である。

夏帯を解きて一日の終りとす

姉は株式会社「灘万」の社長であるとともに料亭など万の女将である。虚子に、

夏帯をどかとかとく句を書けところそ

という句があるが、これは客観的な句であり、姉の句は現役の女将としてのまことに主観的な句であり、女将ならではの句である。

梅雨冷や指一節の湯の加減

これも女性ならではの句である。

私の亡母、楠本浜は料理の天才、名人であった。姉はその母からの薫陶を、高校生時代から受けついでいるわけである。世に女将は多い。客扱い、人使いはうまいが、味・料理に関して一言決めるひとは少ない。姉は亡母の血を見事に引いていると私は見ている。

独活の香に亡母のおちらし偲びけり

ネオン点滅首夏の海辺は琅玕色

琅玕とは日本では竹の色のこと。中国ではヒスイの色。最高の色とされている。

柿村に雀色時　海昏れる

この一句には「北陸片山津」という、前書きがついている。日も、月も、星もない時を、俳諧では“雀色時”という。

浴身の乳房は丸し晩夏光

姉は突如乳ガンの告知を受け、可愛そうに身に授けていた立派な、豊かなものを失う破目となった。私はどんなに心配したことか。しかし、姉は立派であった。精神的

に余り落込むこともなく見事に病氣と闘って数十句をものにしたのである。これは並の人では出来るわざではない。私は感動し、偉い／＼と思った。

夕虹や 芥の川にわが乳房

姉はその難渋を見事に俳句によって乗り切った。

秋旱 片方だけのブラジャー干す

私はこの句に接したとき、思わず、涙が出た。

私と姉とは単なる社長と専務ではない。

私は姉をこよなく尊敬している。どんな、プライベートな私事でも姉には打明け、相談している。

姉はすばらしい人と思っている。その代り私にもきびしい。それでよいのである。

姉、純子よ。

心から出版、お目出度う。

就いて誌す	楠本憲吉	
春滴	昭和五十二年——五十三年	15
黄水仙	昭和五十四年——五十六年	43
私の紫	昭和五十七年——五十八年	69
氷河	昭和五十八年——五十九年	95
グレコの掌	昭和五十九年——六十年	121
雲秋思	昭和六十年——六十一年	145
緑雨	昭和六十一年以降	165
あとがき		

装 幀 野路 健
扉 題 簽 楠本憲吉
口 繪 俳 画 楠本純子

句集

雲秋思

